

OUMC

大阪大学山岳会 会報

No.1

2000年4月

発行 大阪大学山岳会

〒533-0031

大阪市東淀川区西淡路1-13-1 徳永病院内

TEL 06-6322-4498

FAX 06-6320-0700

創立50周年に思う

会長 徳永 篤司

大阪大学山岳会(OUMC)創立五十周年を記念する集会は一九九九年八月二十八日、四十人近い会員・家族の参加を得て、白馬山麓・八方(旧細野)の対岳館で行われた。



OUMCの発足は一九四九年六月、と山岳会報「時報」に明記されているから、ちょうど五

十年を迎えたことになる。それ以前は、医・工・理の学部ごとにスキーを主体にした活動が行われ、しかも、各学部が市内外に散在していたことなどが災いして、学内のすべての運動部が低調であった。

阪大関係者としては、工学部出身の盛岡英治郎、医学部出身の水野祥太郎、恩地裕、理学部出身の関集三各氏ら、すでに登山界に名の知れた先輩たちがおられたが、その活動は旧制高校時代または個人ブレイの域を出なかった。

それが、一九四八年一月、旧制浪速高校OBとして鹿島槍北壁を登った私が、帰路の遠見尾根で、京

大山岳部の合宿に参加していた大島輝夫と偶然に会ったのと、同じ阪大の篠田軍治教授がそのころ日本山岳会(JAC)関西支部長をしておられた関係もあって、自然に山岳会創立の機運が生まれたのである。

また、敗戦後の悪条件にもかかわらず、復員してきた一部の大学OBたちによってヒマラヤ遠征が計画され始めた、当時の状況とも無関係ではなかった。人類最初の八千メートル峰であるアンナプルナ登頂の報が入ったのは一九五〇年であり、ヒマラヤの黄金時代がすぐ後に続いた。そして、本会がピーク29峰に手を付けたのは六一年だった。

記念集会の翌日、私は大島と山本(光)を誘って遠見尾根を訪れた。急峻な鹿島槍北壁をロープウエーから見ながら、五十一年前の一月五日深夜、大島と出会った時のことを回想した。小遠見への道でも懐かしい光景に出あった。八方尾根の向こうに白馬鍾東尾根、そして唐松岳、大黒岳……。ルートのない尾根や谷の登り方を初めて教えられた平川沢や二本松尾根での、苦しかったが、心と

きめく登はんのことを思った。

「時報」によると、創立総会らしき会合は四九年六月に道場・百丈岩河原で行われており、参加者は篠田会長以下、大久保、渡辺、伊藤、徳永、大島、加藤、家田、松久、佐江木、神川、山佐、藤谷と記載されている。阪大山岳会として事実上最初の山行であった同年四月の雨飾山東南稜では大島と徳永の二人であったのが、わずか数カ月で二十人近くに膨れ上がった。

そして驚くべきことに、その年の夏には、剣沢合宿(大島ら七人)、穂高一槍北鎌尾根(久保ほか)、朝日岳・白馬岳(佐江木、藤谷)、木曾駒縦走(大久保、伊藤)と四パーティーを出し、十月から十一月にかけては、北岳パトレス(徳永ら四人)、木曾駒(家田ら三人)、御岳(大島ら六人)、八ヶ岳(大久保、伊藤)に四パーティーが出かけた。これが同年十二月末から翌年一月にかけて行われた白馬主稜厳冬期初登(徳永、大島、家田ら)の成功へとつながっていくのである。

近年、現役の阪大山岳部は極度の部員不足に悩んでいると聞くが、阪大山岳会の草創期も二人からのスタートであった。現役ならびに会員諸氏のご協力を得て、伝統の火を守り続けたいと思う。

梅の木寮の37年

山岳部長 大野 義照

「山小屋」の愛称で親しまれた白馬山ろくの大阪大学山の家「梅の木寮」が、一九九九年秋、解体撤去され、跡地は自然に返された。



山小屋は六二年夏、山岳部、ワンダーフォーゲル部、スキー部の協力で建設された。当時は、

今の車道はもちろん、ゴンドラもなく、建設資材は人力で親の原から運び上げられた。六三年に山岳部に入った私は、先輩から、資材ボツカの苦勞話をよく聞かされた。一年先輩のH氏はだるまストープを上げたとか、ベンチを上げたとか……。

解体理由は、九六年一月から二月の大雪の際、神ノ田圃側に積もった雪に押されて傾いたためである。補修あるいは改築が検討されたが、いずれも費用は六、七千万円の見積もりで、今日の情勢では文部省に予算請求はできず、かといってOBからの寄付で再建できるような額ではなく、あきらめざるを得なかった。

六三年の冬山合宿では、一年生九名は上級生と別行動をとり、サブリ

ーダーの高田さんに率いられて、小屋で合宿した。小屋をベースに天狗原でテントを張り、天気の良い日に小蓮華岳を往復した。天気の悪い日は成城大学小屋前の斜面を踏み固め、ごわごわに凍った綿のヤツケを着てスキーの特訓を受けた。OBにはよくしかられた。それ以来、スキー板に別れを告げた者もいる。当時は部員が多く、何度か、小屋をベースに一年生の冬山合宿を行った。

OBになってからも、時々、小屋を利用した。一番よい季節は春休みの三、四月と五月である。春は雪の中から出入り口を掘り出すのに一苦勞し、雪の多いときは神ノ田圃側の二階の窓から出入りした。天狗原から小屋までがちょうどよい春山スキーの半日コース。天狗原を越えて蓮華温泉までというコースもある。

建設当初は、前記三つの体育会系クラブで小屋の管理をしていたが、管理上の便宜を考慮して大学に移管し、一般学生にも広く開放されていた。しかし、開設期間が夏休みに限られ、また、近年はゴンドラが小屋の上を梅池自然園まで通うようになって登山基地の意義も薄れ、利用者が少なくなつた。山に興味を持つ学生が減少したことも理由の一つであろう。現役部員の数も少なくなつたが、意欲ある部員の活動を引き続き

支援していきたい。

(昭和42年卒、阪大工学部教授)

「現役」時代の思い出

前山岳部長 山田 朝治

大阪大学を退官して十年、その前の山岳部長在任が十一年、従つて恩地裕先生に部長就任を説得されたのは二十一年前になる。恩師篠田軍治先生と相談の上と言われて、渋々お引き受けしたのを覚えている。



恩地先生とは、その十年近く前の一九七〇年、P29峰登頂後に遭難した渡部洋君の葬儀の

件で、学生部長としてご相談したのが面識を得るきっかけだった。それが、後日、恩地先生の後を継ぐことになるうとは夢にも思わなかった。

学生部長時代を含む前後数年間、学生の課外活動について協議する委員会に参加したが、一番心を痛めた問題は、やはり事故であった。それだけに、山岳部長を引き継いだ時、最初に勉強したのは遭難対策であった。しかし、部員からいろいろ話を聞くうちに、まずは大丈夫と安心するだけ私の仕事になった。

次に気になったことは、阪大山岳部がどの程度のレベルなのかということである。勝ち負けを争う運動部なら、その強弱は容易に判定できるだろうが……。しかし、この問題は私なりに結論を出した。「〇〇大学山岳部が××ルート冬の初登攀に成功」なんてのは昔の話。現役部員は、四年間のうちにどんな山でも登れるような基礎技術を習得すればよいということだ。八四年、阪大山岳会遠征隊が七千メートル級のサンゲマル

隊長松尾敬志君の「日本の山で習得した技術だけで登れました」という報告を聞いたときは大変うれしい思いをしたものである。

ところが、そのうちにレベル云々どころか、部員の減少で部活動そのものが怪しくなってきた。毎年二、三千人もの新入生を迎えるのに、勧誘しないと一人も入部しないというのは異常と言うべきか、誠に困ったことである。現役部員に会うたびに人数を聞いては一喜一憂、いや一憂一憂している。何もしないで心配だけしていた山岳部長時代の習慣がまだ続いているわけだ。

創部五十周年に、とんだ泣き言を書いて申し訳ないが、心から山岳部の発展を祈っている。

(阪大名譽教授、関西大学教授)

36人が参加し、盛大に

創立50周年記念白馬集会

大阪大学山岳会創立五十周年を記念する白馬集会は九九年八月二十八日から三日間、長野県白馬村八方のホテル対岳館で開かれ、会員と家族計三十六人が出席した。

初日は、記念集会と夕食後の懇談会。記念集会では、徳永篤司会長が創立当時の思い出、大野義照山岳部長が現役山岳部の現状などについて話し、懇談会では、歴代リーダーらの山行報告などに耳を傾けながら五十年の会の歩みを振り返った。

二日目は雨飾山、白馬大雪溪、榎池自然園、八方尾根の各コースに分かれて山歩きを楽しんだ。なかでも雨飾山登山では、近璋三、二木節夫氏らの「老年組」が見事、頂上を極められたのが光った。

三日目は懇親ゴルフで、十三人が参加した。

参加会員は次の通り。(年次順)

徳永篤司、大島輝夫、田島汎、川島勇、宮本貞雄、近璋三、二木節夫、山本光二、尾藤昭二、坪井圭之助、和子、木村裕一、鷺沢忍、山本進一郎、野田憲一郎、前沢祐一、打出英樹、米沢成二、横尾秀次郎、高田邦雄、木原秀幸、岡久光明、牧野大輔、石浜高明、大野義照、黒田次朗、細

川明彦、田中喜樹、石原敏雄、中岡和哉、大宅幸夫、明神知

昔の猛者も今は老いて…

近 璋三

恒例の夏の懇親会が、今年是对岳館で、それも創立五十周年記念とかで、多くの出席者があるうと出てみることにした。昔、信濃四ツ谷といった駅が白馬駅となり、店が立ち並び駅前であらううろろしていたところ、会員の出迎えを受けたが、思い出せない。なにしろ、五十年ぶりだ。田島、尾藤、山本らの各氏だった。馬

対岳館も昔はわらぶき屋根で、馬



小屋の前を通ってトイレに行ったものだった。それが、あのころ中学生だった丸山庄司君が立派なホテルにしたそうだ。世話になった庄司君のお母さんも冬季オリンピックの直前に亡くなったそうだ。会合は三十六名の出席で、大盛会だった。

対岳館では、



懐かしい面々と再会したが、みんな病氣持ちで、愕然とした。かつてのあの猛

者たちも病には勝てぬか？

A 肝炎を思い、肝臓がんに行進中とか。輸血の失敗で、C型肝炎らしい。売血制度の犠牲者だ。

B テレビの音は大きくしないと聞えない。難聴である。

C 糖尿病だが、これは運動で何とかなりそうだ。今日出席していないが、Eは人工透析で明日も知れない命らしい。

D 不整脈で、危険なり。

私が「頭と顔以外、悪いところなし」と言うと、医学部のやつが「そういうのに限ってポッキリ逝くのです」。で、「老年性膝関節変形症がある」と言うと、「それは死ぬまで治りません。そろそろ山登りやめなはれ」。「ほっとしてくれ、老体性筋肉強化法で鍛練中なり。やめられまっか」。こ

んな具合だった。

夜の部は、まず徳永氏の創部のころの話。医学部の徳永氏と理学部の大島氏が遠見尾根で出会ったのがきっかけで、結成は私の入部の前年とか。初めて聞く話だった。私は、ふらつと部室を訪ねて、つかまった。当時、すでに川島君が入部して五月の連休に雨の中、槍から燕へ行く際、ピッケルの使い方が下手でスリップしたと聞く。私が部室を訪ねたのはその後で、助かった。

住吉さん（P29峰初登頂時の登山隊長）が予定外に出席。何やらごちゃごちゃ言っていたが、P29を選んだのは、マナスル三山のうち、日本山岳会がマナスルを、慶応大がヒマルチュリを登り、いちばん難しいP29が残ったからとか。ヒマラヤから帰ったばかりとかで、やせこけていたが、私より数年以上のはず。回復が早い。人間離れしている。

後立山の話聞いていて、我々を指導してくれた家田先輩がいないのが残念だったが、遠見尾根の遭難碑に間違つて家田さんの名が載っていると。過労がたたり、病気で亡くなったのであり、これはひどすぎる。家田さんは鹿島槍で多くの初ルートを開拓した猛者であり、訂正を申し出るべきであろう。

(昭和29年工学部卒)

「秩父宮記念山岳賞」 を受賞して

三枝 礼子

もが鮮烈で、びっくりするばかり。ひたすら人の後についてP29の東尾根を上り下りしていた。翌年の第四次になって、ようやく、遙かな頂上と目の前のステップだけでなく、周りが少しずつ目に入るようになった。道々、茶店などがあれば入り込んで、聞きかじりの現地語で話しかけたりすることも覚えた。

第三次（一九六九年秋）と第四次（七〇年秋）の二回のP29登山隊に加わってネパールへ行ったのがきっかけで、言語学とか民族学は専門外のくせに、ネパール語輪読会に入った。ネパールの民話や短編集などの翻訳を試したりしているうちに、辞書作りというお鉢が回ってきてしまった。八年余りかかって九七年末に何とか『ネパール語辞典』（大学書林）

の出版にこぎつ

け、ほっとして

いたところ、思

いがけず本書

が、九八年に日

本山岳会が創設

した「秩父宮記念山岳賞」の第一回授賞対象に選ばれた次第である。

第三次登山のころのネパールにはまだ「秘境」とか「神秘の王国」という形容詞がつきもので、私にとつて初めての外国だったから、何もか



もが鮮烈で、びっくりするばかり。ひたすら人の後についてP29の東尾根を上り下りしていた。翌年の第四次になって、ようやく、遙かな頂上と目の前のステップだけでなく、周りが少しずつ目に入るようになった。道々、茶店などがあれば入り込んで、聞きかじりの現地語で話しかけたりすることも覚えた。

それまで外国語と言えは、英語か

ドイツ語の学術文献を読むだけだっ

たから、うる覚えの片言と身振り手

振りでもやり取りができていたのは

まことに新鮮な経験だった。山麓の

人々の様子もまた、限りなく心惹か

れるものだった。そこで、帰国時に

バザールの本屋で、ネパール語の入

門書らしき本を何冊か買い集め、文

化人類学の調査や再度のヒマラヤ登

山を志す人など数人にまじってネパ



労作と秩父宮記念山岳賞のため

ちかけられた。十年余り前のことで、研究調査や業務のためにネパール語を読んでいる人はまだ少なかった。チームを組んで着手できる状況ではなく、「差し当たり、山岳部出身で自由業なら、耐久力も暇もあるだろう」というほどのことから、語学とも研究調査とも縁のない私が辞書作りを引き受けるはめになった。

当時、日本にはネパール語の辞書がないと言っても、ネパール国内にはすでに幾種類もの国語辞典が出版されていたし、数種類のネパール語・英語辞典もあった。未開の地へ赴いて、未知の言語の語彙収集から始めるというのではない。大ざっぱに言えば、既存の信頼できそうな辞書を基盤に日本人が使いやすいように編纂すればよいわけである。幸い、そのころ、以前から知り合いの、若

いネパール人夫妻が日本に留学していたので、彼らの助けを借りて、まずは見出し語数万程度の実用向き辞書を作りましょう、ということになった。

作業開始に先立って語義説明などの記載ルールを念入りに練ったのだが、それでも作業の進行と共に新たな問題が次々に持ち上がった。そのうえ、記載予定外にも意外な発見や興味深い事柄が見つかって、つい道草を食うこと数知れず。作業は遅れる一方だったが、この道草が非常に勉強にもなり、楽しくもあった。

自分の語学力や知識・経験の不足は承知していたが、最初から完璧なものと言っていては、誰も、いつまでも着手できないだろう、機会を与えられたのを幸いに、将来のためにたたき台を作っておこう、と考えた。そして、何年か後に学識豊かな方々の手で改訂されることを期待しつつ何とかまとめてしまった。

ネパールの友人、知人たちが、本書の出版と受賞を我がことのように喜び、祝福して下さったことが、私にはことのほか嬉しい。

（昭和30年薬学部卒）

◇ 三枝さんは今年三月、ネパール政府から「ゴルカダクシンバフ勲章」も受けられました。

永遠のマッターホルン

野田 憲一郎



小屋から見上げたヘルンリ稜

小屋から見上げたヘルンリ稜の山頂は、雪が降り、霧が立ちこめ、登山者たちの足跡が雪面に残っている。山頂は鋭い山稜は十九世紀の登山家たちの冒険心をかきたて、一八五七年のウィンパーたちの勝利と悲劇を招いたことはよく知られている。



メートル）は、氷河が彫刻した最高の傑作といわれる。その孤高の鋭い山稜は十九世紀の登山家たちの冒険心をかきたて、一八五七年のウィンパーたちの勝利と悲劇を招いたことはよく知られている。

私がこの山に出あったのは高校一年の英語のテキストでのことで、すでに山岳部に入っていた私は、強烈な刷り込みを受けてしまった。

山登りを始めたからには、ぜひとも、この山に登りたかった。若くて馬力のあるときは金も暇もなく、五十八歳で初めて挑戦し、六十歳でヘルンリ稜の間まで登ったが、結局、登頂はできなかった。心残りではあるが、もう体力が足りない。頂上には登り損なったが、学ぶところも多く、スイス人の友達もできた。これも人生だと思ふ。

マッターホルン（標高四、四七八

国内の三千メートル峰を全部登ったのは、当然、この山だった。しかし、年を取ってからの登山には問題が一つあった。糖尿病でインスリン注射をしている身で、山登りの仕方も食べ物も全く違う外国の山に登れるのかということだった。でも、とにかく行ってみなければわからない。一九九六年の夏休み、あらかじめJACの先輩を通じて頼んでおいたガイドのイエティとツェルマットのホテル

で落ち合って、まずはトレニングに、ブライトホルン、ポリユックス、カストールと、スイス・イタリア国境の四千メートル峰を三日間登った。イエティは一九九四年のスイス・エベレスト隊のメンパー。岩登りや氷雪の技術などをチェックされたらしいが、これは合格だったようだ。

ただ、問題は、やはり食べ物というか、食習慣の違い。狩猟民族とされる彼らは、食べられる時にはいっぱい食べるが、昼などは食べなくても平気。三食食べられると思ったのが間違っていた。イタリア側の小屋の圧倒的なポリユームの夕食と朝食の軽さ、昼は黒パンにチーズだけ。

これには参った。血糖値の調整も容易ではない。いったんツェルマットに下った夜、イエティにそのことを話したら、無理はしないほうがよいとなつて、そこで中止。やはり文化の壁は厚いと思ひ、その夜は寝つけなかった。

二年後、再挑戦。今度は、ツェルマットまでは家内同伴。ガイドは、イエティの都合がつかないので、彼の紹介で札幌五輪のスキー選手だったグステイ。スケジュールの関係でアタックは一回だけとなった。ヘルンリ小屋に上がる日、日本人のいる店でおにぎりを買うつもりが、その店がなくなつていて、入手に失敗。

仕方なくスーパーで代わりの食料を買い込んで、大粒のアラレの降る中をヘルンリ小屋へ。翌日の頂上を目指す人々の中には、私と同年代の日本人はいなかった。

当日の朝は、四時起き。紅茶に黒パン、チーズを少々。四時半にヘッドランプをつけ、アンザイレンして出発した。取っ付きからフィックスロープ。あとは、やさしい岩登りとコンティニューアスの連続だが、とにかく、スピードが速い。岩は水成岩で、湿っているのが、花崗岩のように爪先だけかけて登るわけにはいかない。腕力の勝負だ。

そのうち、後のパーティーに追いつ越されてしまい、必死でガイドについていく。薄明るくなつて見ると、高曇り。頂上はガスで見えない。七時ごろ、ガイドが「このペースでは頂上に着くのが遅くなり、その前に天候が崩れるだろう」と言う。これで登はん打ち切り。私のマッターホルンは終わった。

やはりヨーロッパは、日本より一回り大きい。六十歳の糖尿病患者としてはよくやったと思うが、少し自分の力を過大に考えていたのかな？ 今度はニュージランドのマウント・クックに行きたいと、スポーツジムに通っている。

(昭和35年経済学部卒)

山甲六の後の震災大神戸

梶本 孝治



「たかが六甲、
されど六甲」の
思いはつのりま
す。

阪神大震災で

最も影響を受けたのが芦屋ロックガーデン一帯です。登山ルート交差点の風吹岩は東南側半分が崩壊し、景観は失われました。また、岩登りのゲレンデとしてなじみのB懸垂岩（Bケン）は、崩壊した岩塊が南壁の取りつきを埋めてしまいました。さらに、地獄谷最奥部のピラーロック

と呼ばれた岩柱のほとんどは崩壊し、凄みのある景観は損なわれてしまいました。奥口座谷の向かい側の岩梯子をルートにもつ荒地山一帯も、岩梯子そのものは崩壊を免れましたが、巨岩の岩組みがくずれたのか、チームに登りを楽しむことができなくなりました。

震災後初めてロックガーデンに入ったのは約一カ月後。岡本から保久良神社、金鳥山から風吹岩、そして中央稜を降りてきたのですが、「灘の火」の石灯笼が山道の下段まで転がり落ち、石の大鳥居は崩れ、狛犬は数メートル先に吹っ飛んでいました。中央稜も岩屑で埋まり、大げさに言えば穂高・滝谷の尾根の取り付きのように岩屑の上をヘッピリ腰で降りた次第です。「毎日登山」で市民に密着した山だけに、閉鎖されたルートも三、四日ではほとんどが再開されましたが、このロックガーデンのルートは最も遅く、約一年後だったと記憶しています。

震災直後、三宮の背山の市章山、碓山に登り、市街地をカメラに収めました。市街地一帯の破損した建物を覆ったブルーの防水シートのモザイク模様が被害状況を克明に表わしていました。野島断層に沿った激震の流れと、六甲山系の支稜に当たる部分、谷筋に埋まったマサ土（花

崗岩が風化した土）の部分とで明らかに被害に見られました。最も神戸らしい雰囲気を持つトアロード一帯の被害が大きかったのもこの要因だと思われ。神戸、阪神間の住民にとってその住居が六甲山の支稜の上か、マサ土の推積地の上かで生死を分けたというのが実感です。老齢期といわれる「老六甲」がその稜線を精いっぱい伸ばして神戸の街を激震から守ってくれたような気がします。

振り返りますと、私が山岳部に入った昭和三十年代は、大学山岳部全盛期の終焉を迎えようとしていた時代で、夏山合宿は若手OBを加え三十人を超す盛況でした。一、二年先輩には神戸高校、灘高校といった地元山岳部で六甲山に慣れ親しんだ方が多く、大阪の街中で育った私には、イタリアンリッジ、キャッスルウォールなどカタカナ名前の岩場を口にする先輩たちがまぶしいばかりでした。

一昨年は神戸外人居留地開放百周年でしたが、今、私たちが親しんでいるこれらカタカナ名前は、明治後期から大正にかけて神戸に居留した山好きの外人たちが仲間内で使った呼称がそのまま伝わっているものなようです。おそらく、北アルプスなどの岩場ルートの名称が、その開拓

期に活躍した大学山岳部の仲間内の呼び名が使われたように。

当時の様子を伝えるものとして、六甲登山の先駆者である大正時代の神戸在留外国人の山好き仲間が発刊したクラブ誌「INKA」があります。その中のF・S・ブース寄稿の一部を引用してみよう。

「神戸の裏山は私にとって決して飽きることはない喜びの源だ。（中略）数多い小道をあこれよじ登つていくと、半時間で尾根にあえぎながらも到達出来る。しかも、そこは神戸の騒々しい町や何マイルも海岸平野沿いにほとんど切れ目なく広がる周辺の町並みの上、一、〇〇〇フィートから一、五〇〇フィートのところにある。（中略）港に入っている二〇艘の巨大な船を見下ろすことができ、紀伊水道から南へ向かったり、狭い海峡を通って西の瀬戸内海へと出発してゆくいろいろな船を見ることが出来る……」

今、私が毎週のように足を向ける六甲山の魅力を言い表しています。六甲山は魅力的な山容にこそ欠けませんが、神戸と一体になった背山として魅力を發揮しているのではないのでしょうか。日本の農村の背景に「里山」があったように、市民の共同財産である「背山」として六甲山を持った神戸は奇跡的な存在とも言える

のではないでしようか。そして、居留地時代のスマートさ、共同財産意識などが伝統として生きついでいるのが六甲山のよさだと思えます。ハイカーが山道で交わす、さりげないあいさつ、自主的に運営されている毎月のクリーンハイキング（ゴミ掃除）などがその一例です。

山岳会の諸兄、いま一度、六甲山に戻ってこられませんか。そこには若い時代とはひと味違った山登りがあります。居留地時代の外国人たちがワイングラスを傾けて山桜を楽しんだような「シニアの山登り」を一緒に楽しみませんか。

（昭和38年工学部卒）

松江便り

大川 和秋

大山はもう見えないかなと、列車の窓を振り返る……。ちょうど安楽を通過する辺りだ。日本海の海岸に沿って遠くに、低い山並みを望むことが出来る。その山並みが海に落ち

込む辺りは美保関である。列車はやがて中海に沿って走り、松江の北に連なる北山連峰が次第にはっきりしてくる。北山とはどの範囲を呼んでいるのかはつきりしないが、どうも島根半島の東西に走る山並みを言っているようだ。

高さは、せいぜい五百メートル程度、京都の東山の並びに似ている。急峻な深い谷がないだけに、昔から日本海から山陰へ入るために利用されてきた古い峠道が残っている。反対側の車窓からは「神話の古里」「古墳の里」と呼ばれる八雲村、東



出雲村を囲む山々が連なっているのが見える。これらもせいぜい五百メートル前後である（八重垣神社、神魂神社、熊野神社といった畏れ多い名前の神社を包んでいる）。宍道湖と中海をつなぐ大橋川に沿って走り、ほどなく松江に着く。

松江は、宍道湖をはさんで南北に広がる人口十四万の町である。市内至る所に水脈が走る。この水がもつと澄んでいればと、いつも思うが、ドブ川だとも思ってしまう。水郷ヴェニスの水も汚い。大阪の水だってそうだ。澄んだ梓川の、また緑濃い四国の吉野川、四万十川の水と重ね

合わせていると、何でもないドブ川と思っていた所で魚が飛び跳ね、ボラの大群が戯れ、青鷺が餌漁りをすのに出くわし、水は臭くはない、と気付く。

赴任して二度目の冬を経験したばかりだが、この気候は、海に近いせいか、宍道湖、中海のせい、夏、冬ともに風がある。瀬戸内側に出るときは、日差しの違いを感じるが、日常は「山陰の冬」という言葉につきまとう暗さを感じない。時雨は京都より多い。風が強いだけに、天気の変化は確かに京都よりも激しいと思うが、自分には、この地の特徴とは思えない。

積雪はこの数年、三〇センチ程度が年に一度あるかないかで、約百キロ西の浜田では積雪らしい積雪はないという。逆に、東に五十―百キロの米子、倉吉、鳥取となると、積雪量がかなり増える。さらに東の兵庫県・京都府北部の但馬、北丹の積雪量はもつと増える。中国山脈の山の高さと日本海暖流の北上の仕方が微妙に関係しているようだ。野草の種類などから判断すると、結構暖かい地域に属する。

松江はラフカディオ・ハーンで有名な。実際に彼がここに住んだのはわずか一年程度であるが、自転車を探索してみると、まさかと思う所に

まで彼の足跡が印されている。また自分の知る歴史では、この松江は、どうしても尼子と毛利の攻防の場ということから始まるが、西に出雲、東に美保関、南に八雲村が位置することを考えると、神話時代からの何かがここにもつと伝わっていてよいようにも思う。

松平家が宍道湖の北側と南側との架け橋工事を人柱を建ててまで成功させたことよって、この町の発展が始まったとされるから、相当な湿地と宍道湖を挟んでの南北の交通の便の悪さを物語っているのかもしれない。とにかく、松江が神話の世界から離れているのが何となく腑に落ちない。それでも、年に一度、全国の神様が出雲神社に参じる前に、ここで一堂に会するという佐太神社があるから、多少は納得している。そして、最近、田和山遺跡という弥生時代末期の古戦場と推測される遺跡も発掘されているから、歴史的に隠されているものが多くあるのは間違いないと思う。

自分は、あと三年は、ここにいます。その間に、ぜひ一度、訪ねてみてください。この遠さ、時間的なもの、距離的なものではない。そのあたりを感じ取って下さい。

（昭和39年工学部卒。平成10年4月から島根大学生物資源科学部教授）

大阪大学山岳部 活動報告

1995～99年度

一九九五年度

リーダー所感

青木 成一郎

四年三人、三年四人、二年二人、一年一人の計十人と、人数では恵まれたため、各自、自分なりの山登りができたと思う。それでも、私の中で印象に残るような充実した山登りを思い出せないのはなぜだろうか、と少し考えてみた。

九三年の剣岳での事故の反省もあり、この年の私の方針は、各部門に事故を起こさない技術と経験を身につけさせることを第一とした。しかし、守りの姿勢が強すぎたせいか、積極性へとつながる雰囲気うまくつくるのが出来なかった。これが結果的に二人の退部者を出した原因かも知れない。

大学山岳部の長所は、時間的制約の少なさにある。充実した山登りに

は、この特権を生かす、積極的な姿勢と雰囲気が必要である。しかし、近年は、部という組織形態さえ形がいつい化し、個人の集まりと化しつつあるようにも感じる。後輩諸君には、いま一度、大学山岳部とは何かを考え、積極的な雰囲気づくりを重視してほしいと思う。

◆冬山合宿・奥大日岳

【期間】12月26日～1月2日

【参加者】青木(上)、尾崎、溝西、

給田、加門、卯城

26日 富山地鉄・立山駅(8・20)

―尾根取り付き(11・45―12・15)

―860㍉付近(15・00)

前日は大阪でも終日雪で、心配したが、それほど降っていないかった。称名川を渡るとラッセルが始まり、三時間ほどで尾根の取り付きへ。さらにラッセルを続け、適当なところで設営する。

27日 出発(7・00)―九〇〇㍉ピーク(9・30)―一、四〇〇㍉付近(16・00)

ひたすらラッセル。一、三〇〇㍉地点からは急登のラッセルで、緩くなったところでテントを張る。一、三八〇㍉付近は広い地形のため、下りで間違える可能性あり。左側に寄りすぎないようにすべきだろう。

28日 出発(7・00)―雪見平一、

五〇〇㍉付近(10・00)―前大日岳(13・30)―前大日岳と早乙女岳のコル手前(15・00)

晴れ。雪見平からは弥陀ヶ原付近がよく見え、ラッセルしてゆくと剣岳が見える。さすがに遠い。やがて前大日岳の登りが終わり、コルの手前で設営。

29日 出発(7・08)―早乙女岳(10・50)―ノ谷頭(12・17)―一、一〇〇㍉付近(13・00)

朝から悪天。ひたすらラッセルをして早乙女岳の広い頂上地帯へ。この辺りから赤布を打ち始める。早乙女岳はとても広いので、視界が悪い時にはヤバそうである。大日岳への登り始めにテントを張る。

30日 出発(7・20)―一、三〇〇㍉付近(8・20)

朝から非常に天気が悪い。とりあえず行動するが、視界が悪くなり、辺りに木がなくなつたため行動を中止。テントに入つて天気図を書き、様子を見るが、回復の見込みがないため、そのまま幕営。

31日 出発(7・20)―大日岳(9・30)―七福園(10・00)―アタクク出発(10・30)―奥大日岳(13・20)―七福園(15・30)

朝から快晴。前日は位置がよく分からなかったが、大日岳の登りは少なくて、それほどラッセルはなく、頂

上へ。この付近は地形が広く、視界が悪ければ間違えやすいだろう。時間があるため、奥大日岳へ向かう。ポイントには、七福園から奥大日岳へのコルへの下りで右側が切れ(雪庇も多少ある)、頂上が見え始める辺りから左側に雪庇が発達していること、さらに最後の登りが比較的やせていること(登りは20㍉程度)。今回は使わなかったが、メンバーによってはザイルが必要かもしれない。復路も天気はもっていたが、七福園に近づくころに地吹雪が始まり、ぎりぎり帰着。

1月1日 出発(7・24)―大日岳(8・30)―早乙女岳(10・15)―前大日岳(14・00)―雪見平(14・47)―一、五〇〇㍉付近(15・00)

視界は悪いが、帰路をたどる。大日岳からは、往路に打つておいた赤旗を目標に下る。前大日岳の下りで迷つてしまい、少し時間をロスしたが、がむしやらに下り、適当にテントを張る。

2日 下山V出発(7・30)―八〇〇㍉付近(11・05)―林道(12・26―13・10)―立山駅(14・05)

【他の主な山行】春山||中央アルプス、北アルプス表銀座||夏山定着||涸沢Vアイゼン合宿||御岳

新人が一人、入ってきた(学年は三年だが)。彼は二年間いたが、我々が非力なばかりに、あまり厳しい山行に連れて行けなかった。非常に申し訳なかったと反省している。

彼は近年の部員には珍しい、ごく普通の学生だった。今度会ったら、普通の大学生から見て、山岳部の雰囲気がどんな感じだったか聞いてみようと思っている。

◆冬山・飯豊山系 川入―三国岳―飯豊本山―大日岳往復

【期間】12月27日―30日

【参加者】加門(1)、卯城、五十嵐、田部

27日 川入(11・00)―笹平(15・00)

偵察の鹿島槍が敗退に終わったため、危険の少ないところでラッセル山行をと考え、東北出身の五十嵐氏が夏に何回か登っている飯豊山系での冬山になった。しかし、近年の寡雪傾向は東北の山にまで及んでいるらしく、電車から見る山々に雪はほとんどなかった。長い坂を登ってゆくと、途中から膝下ぐらいの積雪になる。加門が数日前から風邪を引いて体調が悪いので、早めにドン。

28日 笹平(8・00)―三国小屋(12・00)

雪はやはり膝ぐらいまで。予定よ

り早く進む。心配していた剣ヶ峰も雪が少なく、あっさり通過。三国小屋には早く着いたが、天気があまり良くないので小屋に入りドン。

29日 三国小屋(6・30)―切合小屋(8・30)―御西岳(12・30)―切合小屋(16・00)

少しガスっているが、問題なし。予定は御西小屋までだが、雪が少ないため切合小屋から空荷で行けば、一気に大日岳往復が可能と判断、切合小屋に荷物をデポして大日岳まで

アタックをかける。このあたりから強風になり、アイゼン歩行になる。

ダウンした加門を飯豊本山小屋に残し、御西岳を過ぎ、御西小屋に着い

たところで、残り時間と強風を考えると引き返す。

30日 切合小屋(8・00)―川入(13・30)

ショートカットできそうだと目を付けていた松ノ木尾根を下る。しかし、やはり甘かったようで、ブッシュに苦勞する。五十嵐氏はブッシュを体当たりでぐぐり抜け、どんだん滑り降りてゆく。残り三人はとても追いつけない。最後のほうは雪も切れ、泥々になって川入に着いた。

【他の主な山行】春山―横尾尾根から槍ヶ岳▽夏山定着―濁沢▽アイゼン合宿―白山

一九九八年度

リーダー所感

卯城 鉄平

阪大山岳部にとって大きな転換点となった年だったと思う。医学部山岳部からの参加である。四人ほどの参加があったため、ここ二、三年の部員不足から一変、そこそこの人数で山行ができた。半面、新人二人が秋以後、相次いで辞めてしまったのは、近年のパターンではあるが、これからの課題として残る。

また、新人がやたら多いという異常事態になったため、在学OBをかき集めても、新人教育に追われる状

況になり、山行や普段のメインになっていたフリークライミングも寂しい内容になってしまった。

個人的には、春の西穂から奥穂への縦走は、できれば槍までにしたかったとはいえ、大学生活の中で最も充実した山行になった。行動を共にしたメンバーには、ぜひ、よりレベルの高い、充実した山行ができるよう頑張ってもらいたいと思う。

◆春山・西穂から奥穂縦走

【期間】3月20日―23日

【参加者】卯城(1)、五十嵐、尾崎(OB)

20日 鍋平高原駅(10・30)―西穂高口(14・10)―16・20)―西穂山荘(17・10)

初日から雨。そのうえ、強風でロープウエーが止まり、いつ動くか分からないという。仕方がないのでスキー場を歩き始め、苦勞して終点付近まで行くと、何とロープウエーが動いているではないか。西穂高口では我々だけが濡れネズミである。西穂山荘まで行くのを遅らせ、ストープの前に陣取り、濡れたものをすべて乾かす。山荘へ出発するころには雨は上がっていた。

21日 出発(6・00)―独標(7・30)―西穂(9・00)―天狗ノ

頭(13・00)―天狗ノコル(14・00)

—コブ尾根の頭手前(16・00)

好天である。西穂まではアイゼン
を利かしながら行く。西穂を過ぎた
ころからルートファインディングも
所々出てくるが、問題はなく、楽し
い稜線歩きである。天狗ノ頭からの
下降中、五十嵐がスリップして、眼
鏡のレンズをなくしてしまった。天
狗ノコルへは懸垂一ピッチ。コブ尾
根の頭まで行きたかったが、手前の
コルでドン。

22日 出発(6・25) — ジャンダ
ルム(7・30) — 懸垂(8・00) —
ロバの耳(11・40) — 奥穂(12・20)
— 穂高岳山荘(13・00)

引き続き好天だが、前日同様、昼
前からはガスとなった。ジャンダル
ムでは、ロープを出さずに巻いて行
けないかなどと考え、少し時間をロ
スした。またロバの耳では、まず稜
線通しに行こうとしたが、懸垂がで
きずに断念。次に岳沢側から巻こう
としたが、これもだめ。結局、飛騨
側から巻いたが、どこまで続くのか
分からない長いクライムダウンは結
構つらかった。その後、適当なレン
ゼを登り返して、後ろから来た社会
人パーティーとザイルを一本ずつ出
し合って懸垂をしたが、中途半端な
所で懸垂を終わらせねばならず、ち
よつと悪かった。馬の背は視界が悪
かったこともあり、あつさり奥穂に

出た。小屋へは雪庇に気を付けなが
ら右へ右へと行けば迷うことはない
だろう。

23日 出発(6・12) — 涸沢岳
(7・30) — 白出沢(10・12) — 新穂
高温泉(11・46)

好天。寒かったが、何事もなく下
山。涸沢岳西尾根は樹林帯に入るま
で意外と気が抜けなかった。

【他の主な山行】夏山定着 涸沢
▽アイゼン合宿 御岳▽冬山 北ア
ルプス裏銀座

一九九九年度

リーダー所感

加門 洋一郎

部員不足は相変わらず。適任者が
いないため、私が、前代未聞の修士
二回生、山岳部六年生のリーダーと
なった。他のメンバーは前年半ばに
合流してきた医学部山岳部の数名と
久しぶりの一年生一人である。

少しは山岳部らしい山行をしても
らおうと頑張ったつもりではあった
が、結果的に短い山行ばかりになっ
たのが残念である。新年度からは医
学部山岳部の四年生にリーダーを引
き受けてもらうことになった。医学
部の方に「山岳部延命」措置を取っ
てもらった感があるが、もう少し頑
張って山岳部を復活させる人材を発

掘してもらいたい。この世界は強い
人間が一人いれば、なんとかなるの
ではないかとも思う。

◆夏山定着合宿・剣沢

【期間】8月7日—14日

【参加者】加門(1)、坪山、佐田、
木嶋、高沢、磯部(OB)

◇チンネ左稜線(加門、佐田)

10日 剣沢(6・30) — 池ノ平
(12・00) — 三ノ窓(15・30)

池ノ平小屋から池ノ平山までは、
ハイマツの香り漂う、のどかな夏山
である。小窓への下りは少々嫌らし
い。時間はかかったが、無事、三ノ
窓へ到着。クライマーは三、四人い
た。テント場と見えるところで適当
にビバークを決め込む。

11日 チンネ取り付き(6・00)
— 終了点(11・30) — 本峰(13・30)
— 剣沢(15・30)

ビバークは夏でも寒く、あまり寝
れず。朝一番に左稜線に取り付く。
下部はボロボロでいやらしく、歩く
ところが多い。核心のV級と書いて
あるハンクも、ピンが多いので簡単
である。上部はすっきりしていて面
白いが、途中からガスつてきて景色
が見られなかったのは残念。疲れの
ためか、本峰が遠く感じられた。雨
の中、剣沢に帰還。

◆冬山・八方尾根から唐松岳

【期間】12月26日—27日

【参加者】加門(1)、佐田、木嶋、
高沢

26日 ゴンドラ終点発(9・00)
— 二、二〇〇崩地点(15・00)

ゴンドラを降りると、いきなり腰
までのラッセル。下級生は初めての
大雪に戸惑っていた。尾根上に出る
と風雪で、視界は十メートル。他パ
ーティーと交代でラッセルをしながら
進む。途中、八方池あたりで少し
迷う。二、二〇〇崩地点直下は雪崩
が怖かったが、直登はせず、左から
巻いて上がったところドン。

27日 出発(7・00) — 丸山ケル
ン(11・00) — 唐松岳(12・25) —
ゴンドラ乗り場(16・00)

快晴なので、ガンガン進む。ラッ
セルは胸までの所もある。丸山ケル
ンからはアイゼンで歩けたが、とん
でもない強風で、前進をためらって
いると、後ろからきた強そうなお
じさんたちがどんどん先に進むので
行こうと決心する。いざ進みだすと
大したことはなく、一年生もすんな
りと唐松岳頂上へ到着。ゴンドラの
最終にぎりぎり間に合った。

【他の主な山行】春山 山 南ア白峰
三山▽新歓(5月) 白馬岳主稜▽
アイゼン合宿 御岳

追悼

水野 健次郎氏（本会名誉会員、ミズノ会長）平成11年4月15日、死去。85歳。昭和13年理学部卒。美津濃（現ミズノ）の二代目社長としてスポーツ用品の改良、普及に尽くされる一方、P29



峰はじめ本会の海外遠征などに物心両面の支援をいただいた。

P29 遠征の陰の功労者

大島 輝夫

水野家とは、私の父の代からの付き合いで、理学部の同じ研究室の大先輩として個人的にも親しくさせていただいただけに、本当に悲しい。

水野さんの山登りは甲南の尋常科時代からで、阪大山岳会創立の際、故篠田軍治先生の勧めで入会されたと記憶している。すでに会社の要職にあり、会に顔を出されたことはなかったが、篠田先生とのご縁で、その後も何かと協力いただいた。

なかでも忘れられないのは、P29 第一次遠征の準備の時、私を連れて関西の経済団体を回っていたり、文字通り、寄付集めの先頭に立って努力していただいた。この時

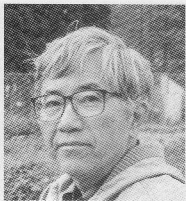
の募金活動が、その後数次の海外遠征の基礎をつくったと言ってもいいだろう。その意味ではP29登頂の陰の功労者と言える。

お人柄を一言で言うと、大阪的と言うか、前向きで、ざつとばらんの方だった。随分前のことだが、私がスキー好きの学生の就職依頼の手紙を差し上げたところ、自ら、その学生の家で電話をされ、驚いたこともあった。とにかく個性豊かな経営者で、ミズノの海外事業の発展もこの方あってのことだと思ふ。

（昭和27年理学部卒、談）

坪井 圭之助氏（本会評議員、元

阪大医学部講師、元日生病院外科部長）平成11年12月1日死去、69歳。昭和31年医学部卒。山岳部時代は、



鹿島槍北壁直接尾根初登をはじめ、春の後立山逆縦走、下ノ廊下横断などに活躍された。

「生涯の友」逝く

二木 節夫

坪井君と初めて会ったのは旧制松江高校の同じクラスで机を並べた時だった。共に大阪出身で、山に興味があったため、親密になった。彼は

すぐに山岳部に入り、夏の剣岳合宿には一年生でただ一人参加したはずだ。大きな山に一緒に行く機会はないが、近くの山には折にふれ登った。高校生活はわずか一年だったが、不思議にウマが合い、生涯の親友になるような気がした。

阪大へは私が一年先に入り、直ちに山岳部に入ったが、彼の浪人中も時々会った。部室の前にあった好日山荘の店が落ち合う場所になっていた。合格したら、当然入部するつもりだった彼も時には山岳部集会に参加し、部員とも顔なじみになった。しかし、阪大時代も不思議に大きな山行を共にしていない。私が昭和二十六年夏のカクネ里直接尾根に失敗した後、翌年に坪井君らが成功したのが、間接的ながら唯一の接点かと思う。その時、「君がぶら下がったハーケンを見つけたよ」と笑いな

ら言っていたのを覚えている。岐阜に就職してからも二度ほど自宅に来てくれたし、私が関西に出かけた際に、大阪で高校のミニ同窓会を開いてくれたこともあったが、会う機会はほとんどなく、時々、電話で近況を話す程度だった。

再び会うようになったのは、恒例の夏の白馬集会に私が参加するようになってからだ。以来、白馬で三度会った。彼と二回、奥さんと一回、

ゴルフを共にした。去年のゴルフの前、奥さんに「あまり急かせて歩かないで下さい」と頼まれたが、本人は至って元気で、全く健康人と変わらぬプレーをしていた。病気のことにしても、事実を淡々と話すので、こちらがドギマギするほどだった。しかし、これが彼と会った最後になってしまった。

会う機会は少なかったが、常に私の頼もしい相談相手であり、何でも話せる、数少ない親友の一人であったと、今つくづく思っている。

（昭和29年工学部卒）

編集後記

伝統の「時報」

をリニューアルし、た新会報「OUMC」をお届けします。タイトルは三枝礼子さんのデザインです。今後、年一回発行し、会と現役の活動を報告するとともに、会員相互の親睦に役立てればと願っております。山行記録、随筆、近況などのご寄稿をお待ちしています。会報とは別に「50年誌」の発刊も予定していますので、併せてよろしく願います。

なお、会合の出欠はがきに添えられた「近況」を今号に掲載する予定でしたが、紙数の都合で「別冊」とさせていただきます。

（会報担当・高田邦雄）